

## 第4節 表面採集品ほか

### 1 石器・石製品 (図 174)

54 は、無茎凹基式の石鏃である。

55 は、地主の山岡倫之助氏が表面採集した磨製石斧である。長さ 11.6cm, 幅 6.0cm, 厚さ 3.8cm, 重さ 460g で、緑色岩製。灰黒色硬質の石で、もっとも近い産地は埼玉・群馬県境である。蛤刃で横断面が扁楕円形の縦斧である。全面研磨の精製品である。刃部は両面に使用による条痕が長軸と斜め方向についており、縦斧として使用したことをよく示している。頭頂部は欠損が生じたあと、再度の研磨をおこなったあと、もう 1 度欠損している。石材・形態とも弥生時代の太型蛤刃石斧と変わるところはない。

56 は、石鉢形の磨石・敲石である。やや多孔質で、a 面に研磨痕があり、敲石として使った時には 1/3 を欠損している。

57 は、石皿の破片。20.8cm×11.2cm, 厚さ 4.5cm, 花崗岩製。自然礫の平らな a 面をもっぱら使っており、欠損後は敲石として使っている。

58 は、小玉である。滑石製。

なお、中央トレンチ (162 頁)、南北トレンチ (272 頁)、東西トレンチ (296 頁) 発掘の石器および表面採集の石器 (300 頁) の石質について、矢作健二氏の所見を記しておきたい。ただし、産地については、あくまでも「もっとも近いところ」を示しているもので、より遠隔の地から石材または製品がもたらされている可能性も否定できない。遠隔地の石材では、磨製石斧や石棒は製品の搬入であろう。総じて、荒海貝塚付近は石材に恵まれていないことを考えさせる。

推定産地	石質 (石器, 点数)
関東山地	砂岩 (敲石 4, 石皿 1, 砥石 7, 石斧再生品? 1)
鬼怒川流域	流紋岩 (石皿 1, スクレイパー 1), 輝石安山岩 (磨石 1), 角閃石安山岩 (石皿? 1)
関東山地あるいは鬼怒川流域	玄武岩 (敲石 1)
茨城県下	角閃岩 (磨製石斧 1), 緑色片岩 (剥片石器 1)
埼玉・群馬県境	緑色岩 (磨製石斧 2, 石棒 2)
荒川上流域	蛇紋岩 (磨製石斧 2)
北関東の第四紀火山か	軽石 (1), スコリア質輝石安山岩 (1)

(春成)

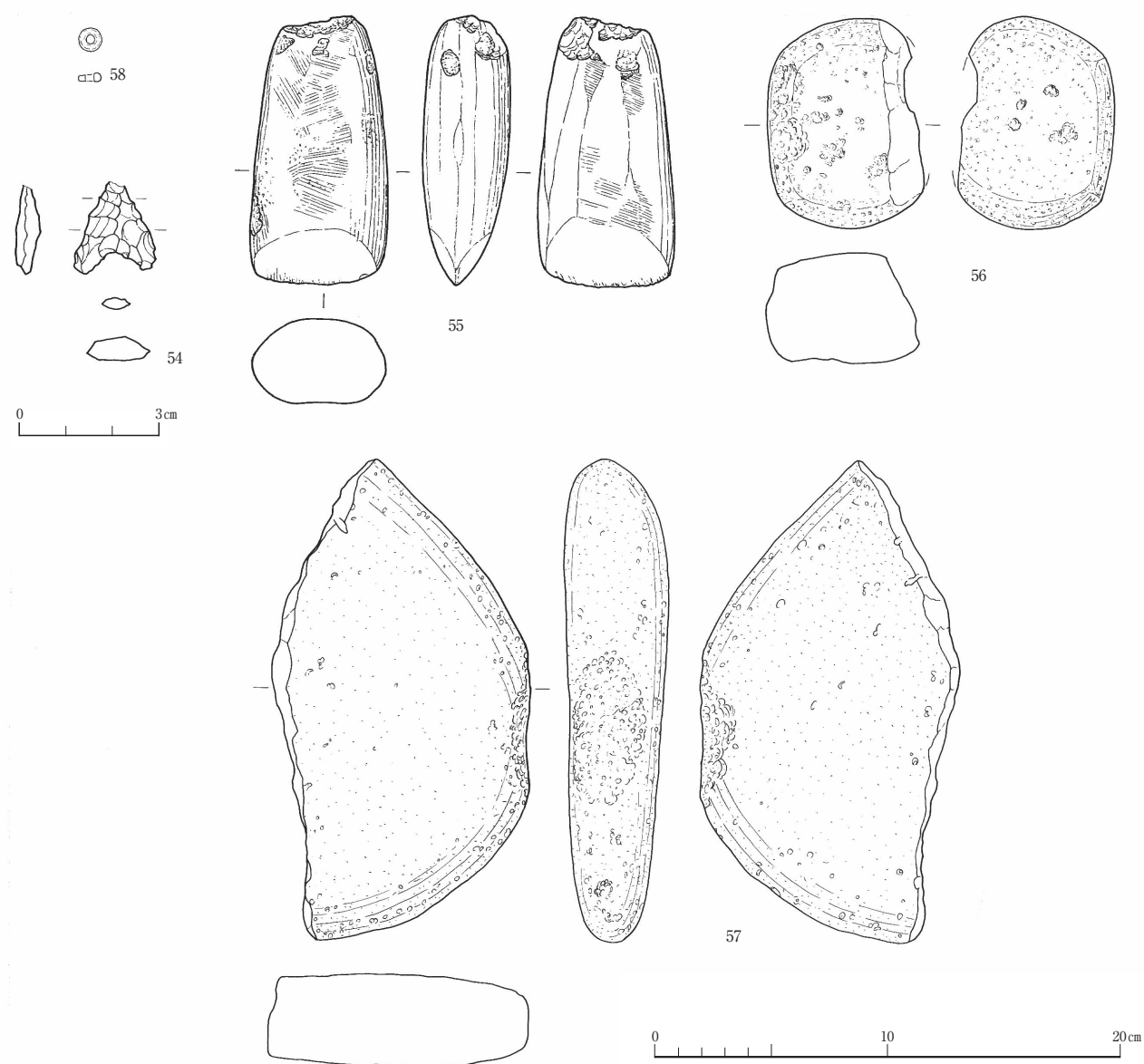


図 174 表面採集の石器・石製品

表 43 表面採集石器・石製品一覧

番号	種類	計測値 (cm)	石質	備考
54	打製石鏃	2.4×1.5×0.4		
55	磨製石斧	12.2×6.0×3.8	緑色岩	弥生時代のものか 山岡倫之助採集
56	磨石	9.1×6.5×4.8	安山岩	
57	石皿	20.6×(11.2)×4.5	花崗岩	半欠品
58	小玉	0.5×0.25	滑石	

## 2 骨角貝製品

1～6 は、試掘坑から出土した貝輪の未成品であり、いずれもベンケイガイでつくられている。

7と9は、26I区から出土したイノシシの牙でつくった銚先と鹿の落角座である。銚先は返しをもち、下位に孔を穿つ。鹿の落角座は第1枝のやや上方で角幹を切断しており、中央トレンチから出土した溝のある鹿角とおなじ切断方法で折り取られた残余である。

10も、まったくおなじ鹿の落角座である。縄文晩期の三河・吉備地方であれば男性用の腰飾りの素材であるが、そのような形跡は認められない。

11は、スクレイパーの破片であろうか。ハマグリまたはミルクイ製である。

(設楽)

表 44 26I区・試掘坑出土・出土地点不明・その他の骨角貝製品一覧

番号	種類	出土位置	種	最大長 (cm)
71	貝輪未成品	試掘坑 C 攪乱	ベンケイガイ	6.5
72	貝輪未成品	試掘坑 A 攪乱	ベンケイガイ	7.4
73	貝輪未成品	試掘坑 A 攪乱	ベンケイガイ	3.7
74	貝輪未成品	試掘坑 A 攪乱	ベンケイガイ	4.4
75	貝輪未成品	試掘坑 B 攪乱	ベンケイガイ	3.1
76	貝輪未成品 (腹縁)	試掘坑 A 攪乱	ベンケイガイ	3.6
77	銚先	26IC 1 層	イノシシ下 C	2.9
78	骨器未成品	?	シカ	6.2
79	鹿落角座	26I- d E 1 層	シカ	7.5
80	鹿落角座	B トレンチ褐色土	シカ	7.0
81	貝スクレイパー?	試掘坑 A 攪乱	ハマグリもしくはミルクイ	5.5

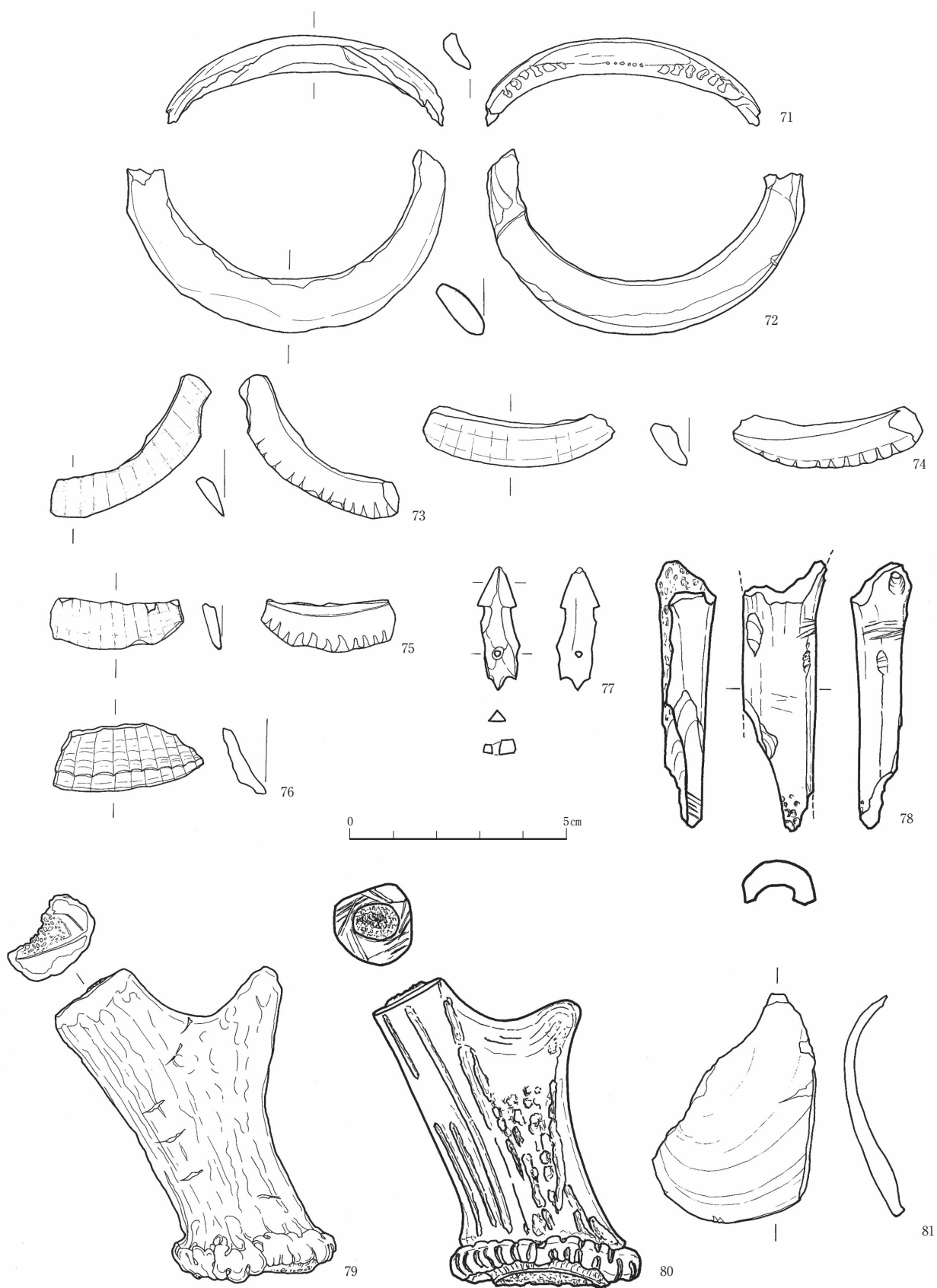


図 175 26Ⅰ区・試掘坑出土・出土地点不明・その他の骨角貝製品